

入選

小さなことでも

鹿児島県 志學館中等部

二年 藤崎 ひまり

「今日も疲れたな……。」

部活動終わりの帰り道。いつものように市電に立って乗っていた。その日は7時間授業で、部活まであったので、とても疲れていた。

「帰ったら、ご飯をお風呂どっちにしよう。そういえば、宿題もあるんだっ。いやだなあ。」と、寝そうになりながらそんなことばかり考えていた次の瞬間、うしろから急に声をかけられた。

「あなた、ここに座りなさい。」

妊婦さんかお年寄りがいたのだろうか、そう思いながら振り返ると、70歳ほどのおばあさんが私をまっすぐに見ていた。あっけにとられていると、おばあさんは優しい顔で、

「あなた、とっても疲れた顔をしているわ。こんな遅い時間まで、学校お疲れ様。私はもうすぐ降りるから、座って。」

と言った。驚いた私は、

「いえいえ！ 私もすぐに降りるので大丈夫です！」

と言ったが、おばあさんに、

「年寄りのお願いを聞いてちょうだい。」

と、冗談交じりの笑顔で言われたので、おばあさんにお礼を言い、座らせてもらった。

電車に揺られている間、私には嬉しい気持ちと少しの罪悪感があった。本来なら、私が席を譲るべき相手だったのに、逆に譲られてしまった。これで本当によかったのか、無理してでも断るべきだったのではないか。そう考える間に、気づけば私が降りる駅に止まろうとしていた。急いで、前にしていたリュックを背負い、駅に降りると、席を譲ってくれたおばあさんが前の方を歩いていた。

「同じ駅だったんだ。」

そう思うと同時に、体が勝手に走っていた。

「あの、さっきは本当にありがとうございました。でも、すみません。おばあさんも疲れていたはずなのに……。」と言うと、

「あら、全然いいのよ。私、元気なおばあちゃんだから。」

と、さっきの冗談交じりの笑顔で言った。私が声を出して笑うと、おばあさんもいっしょに笑って、そのまま途中まで二人で歩いた。別れ際、私が改めてお礼を言うと、おばあさんは、

「人に親切にすると、みんながいい気持ちになるのよ、覚えておきなさい。」

と言った。私は、「はい」と大きく返事をして、家へ帰った。

今回のできごとで私は、親切というのはした方もされた方もみんながよい気持ちになることがわかった。いつもの変わらない毎日の中に、こういった嬉しいできごとがあると、そのあとの生活もがんばろうと思えるし、辛いときも乗り越えられる。小さなことでも、相手にはとても大きな影響を与えているかもしれない。

これから日常生活でそういったシーンがあれば、積極的に行動しようと思った。